

武田ミキ先生に対する私ごとの思い出

友 瀧 一 郎

昭和五十九年二月二十五日に学長が採用のため面接するから私に來学するよう先輩である総務課長の山田幸造氏より連絡がありました。

私は昭和二十五年国立大学に奉職・以来三十四年間文部大臣の辞令一つで広島を振り出しに新潟・徳島・広島・

三、学園運営の寛と厳

宮崎と学生部事務官として転勤し最後は山口大学で、昭和五十九年四月一日付けをもって定年退官を迎えることとなった。

当日、図書館事務長予定の十川氏と私の二名が面接を受けました。最初に十川氏が入室して相当に時間が経過しても出て来ない。随分長い面接だなと思いついて待つてやつと私の番となった。学長室に入るとミキ学長・学千副学長・横山教務部長がおられ先ず御挨拶をした。私は就職採用面接だと思つたのでいささか緊張気味でした。

広島文教女子大学について私が承知していた事は、昭和二十三年可部にできた女子専門学校でその後短大となり大学も設置され昭和五十六年に初等教育学科が認可、昭和五十八年に学園創立三十五周年を迎え盛大にお祝いをしたこと、広島大学から非常勤講師として多数講義をしておられるくらいで詳しい内容は良く知りませんでした。

面接の三人の先生方とも初対面でした。私は面接である以上いろいろとお尋ねがあり、それに対して如何に答えるかを考えていました。ところがミキ先生の私学教育・経営の信念についてのお話と私に対しての心構えについて、ると話され、私には質問など一切ありませんでした。学長の話しに「ハイ・ハイ」と云ってお聞きするのみでした。約三十分くらい経過した頃だと思いますが、学千先生が学長に「もうそのくらいでよいのではないですか」と云われて、それを無視したように引き続きまた十分間くらいミキ学長のお説を拝聴いたしました。このような採用面接は初めてで、いささか戸惑いを感じました。

帰り道で面接とは云いながら、学長の話は長かったこと、女子教育と私学経営の信念と熱意、私に国立大学で長い間勤めて身についた「親方日の丸」的なことは拭い去れと、懇々と云われたのだと思った。内実これは大変なことになったぞとも考えました。

その後、教務課長として採用後も一年間位は、度々「親方日の丸」ではいけないことを注意され、徐々に私も考えを改め反省もした。ミキ学長は私は同郷の備後の生まれであり、また私の祖母（万延元年生れ百才で没）と云うことなすこと氣質が良く似ていて、意志が強く、信仰心厚く、早く後家になったので経済的にも苦勞し、本家分家を通して家長であつたせいか、私たち七人兄弟姉妹は随分と昔流に躰けられた。それ故ミキ学長とは時が経つにつれて、非常に親しみを覚えるようになりました。

私の採用は、教務課の建て直し、即ち大学としての教務關係事務を確立する事にあつたと思います。課長になつて二年間は初心に帰つて路線の基礎工事からレール敷きに学長の激励のもと専念努力し、私のモットーである「自分の為でなく後々の人のために確実な仕事をしておくこと」に課員と共に頑張りました。

学長は、早朝から夜遅くまで学長室で朝・昼・晩の食事をし、教育・私学経営一途に土曜も日曜もなく、春夏秋冬も忘れ、仕事の虫でした。

私が一番困つた事は、予算の少ないこと、「入るを量つて出ざるを制す」「無から有を」「節約と工夫」の学長であるから余分な経費は禁物。文部大臣委嘱（補助金など無し）で行う夏の司書講習は、予算として三百五十万円くらい必要なのに十万円の子算（これは前課長からの引き継ぎでマイナスで経理すれば良いとの事であつた）、二年目の途中に学長に呼ばれ「課長さん、貴方はどうして講習の経理をマイナスでやっているのか」とのお叱り、私はまったく頭にきて「前課長からの引き継ぎと昭和四十七年からやっている事、支出に対して学長はすべて決裁印を捺しておられるではないですか」と若干語気を強めて申したところ、「来年からは必要な経費を予算計上し要求しなさい」とあつさりところちらがウツチャリをくつた形で解決したのを今でも忘れられません。

三、学園運営の寛と厳

それ以来ミキ先生は「私は貧乏なんでね」と云いながら、こちらの筋を立てた予算を認めていただき、少しずつ増加した。年間の予算を節約して、学長の許可を得て高額な事務機器類等を購入整備し、仕事の機械化をすることが出来ました。

毎日四時頃決裁等の書類を総務課へ提出、五時過ぎに学長室に決裁箱が行くとそれからがミキ先生の事務的な仕事が始まります。

私が帰宅して風呂に入り七時頃夕食をしていると、ミキ先生から電話があり御下問となる。フリーハンドで答えられる時は良いが、そうでない時は困って「明朝お答えします。」と云うとミキ先生は非常に御機嫌斜めとなるが、仕方ない。翌日八時過ぎに出勤すると早速に学長のお呼びである。そのくらい仕事については徹底していました。ある時、電話があり、種々御質問、この件についてはお質ねがあると思ひメモ書きして渡してあるのにそれが無いとの事。「それではすぐタクシーで参ります。」と電話を切り往復その頃で四千円あまりかかるので、家内に娘に直ぐ自動車を運転して来るよう連絡させ身支度をしていると学長からまた電話で「捜したらあった、あった。良く解ったから来なくてもよい」とのこと、やれやれといった一幕もありました。

ミキ先生は「いつ寝ているのだろうか、タクシーは嫌いだが、電話は好きな人だな」といつも思っておりまして。就職して間もない頃、私が学長に説明する中で「チューター」（指導教員）と云ったら「課長さん、私の学校ではそのようなことはいんさんな、学級主任と云うのですよ」と。私はビックリしたが、ミキ学長であればさもありなんと思ひ「解りました」で納めた。その後部科長会か役員会かで、大学院も設置されたことだし「チューター」と云うことに決定したら、私に前のことは何も無かつたように「チューター」「チューター」と連発されたのには、

私の方が驚いたこともありました。

就職面接の時・予算のこと・夜電話による仕事の件・チューターの話、これらは総ては今にして思えばミキ哲学の一端であり先生の生きざまであったと思います。

ミキ先生には九年間御指導を賜りましたが、つまらぬ私という人間も御理解いただき、「課長さん、細く長く学校のために勤めて下さいよ」と事あるごとに申され恐縮いたしました。

十二月七日ミキ先生を見舞った時、丁度ベットの上起きておられ、先生の温かい両手を握り大きな声で顔を近づけて御挨拶をした私が解っていただけ安心しました。

その後、東京から学千学長に所用があつて電話をした時、ミキ先生の容態が良くないので入院させようと思つているとの事であり心配していた。私が帰広する朝、灯火の消えるように永遠の旅に立たれた事を知り、就職して以来春夏秋冬九年間の先生の存在が私自身に取つて大きかつた事を痛感いたしました。

葬儀の日、多くの教え子たちが、出棺にあたつて皆おえつして、花を供え最後のお別れをしているのを見てミキ先生の「心を育て人を育てる教育」の偉大さを感じました。

ミキ先生の御冥福を心からお祈りいたします。